

May 2017 subject reports

Japanese ab initio

Overall grade boundaries

Standard level

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 13	14 - 27	28 - 44	45 - 58	59 - 72	73 - 85	86 - 100

Standard level internal assessment

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 3	4 - 7	8 - 11	12 - 15	16 - 18	19 - 21	22 - 25

提出された成果物の特徴および適切さ

大多数の教員がアビニシオガイドに記載されている手順に沿ってレコーディングを進めた。各パートの始まりを生徒に認識させる為とその旨をその都度伝える一方で、自然な会話ができるように留意する教員が多くいた。また、不安を感じたり緊張したりしている生徒をリラックスさせ普段の実力を出せるように、生徒に応じて様々な方法を試み工夫する教員もいた。

成果物の更なる向上を目指す為に以下の改善点が挙げられる。

日本の文化と関連がなく、叙述をする事がアビニシオの生徒にとり難しい VS が複数あった。教員は日本文化に関連した VS を準備しなければならない。昨今はインターネットの検索機能が発達しているため、比較的容易に入手できるであろう。また、トピックに関連した、自身で撮影したと思われる日本の風景写真を使用している学校があった。教員は VS を準備する際に、生徒の年齢を考慮し彼等にふさわしいものを選択する事が求められる。

状態が悪いレコーディングがやや多くあった。静かな室内でレコーディングがされていても音量が十分でなかったり、教員と生徒の声以外の大きな雑音が原因で内容が聞き取り難くかったりするものがあった。前者の場合は学校の IT 関連のスタッフと、後者の場合は IA をコーディネートするスタッフと事前にレコーディングをする時間帯や使用する教室等に関して十分な報告・連絡・相談をする必要があるであろう。

レコーディングの制限時間は概ね守られていたが、学校により指定された時間の誤差が 1 分以上短かったり長かったりするものが少なからずあった。また、各パートの時間配分が正しくないレコーディングも散見された。自然な会話を維持する為に多少の誤差は仕方がない部分があるが、それを大きく逸脱しパート 1 で 3 分から 4 分もの間話し続ける生徒もいた。教員は生徒の話の内容とそれにかけている時間の兼ね合いから判断してなるべくスムーズにパート 2 へ移行するべきであろう。

パート 2 とパート 3 において、教員は生徒が質問に回答する際にヒント等を伝える事はその必要がない限り極力避けるようにしたい。また、一問一答形式の質疑応答は避けるようにし、生徒が可能な限り自己表現をする機会を作るようにしたい。

教員は生徒の発言を遮る事がないように注意を払わなければならない。例えば、生徒が発言を継続しようとして思考を巡らしている間に、別の質問や話題について話し始めるべきではない。できるだけ生徒に発言の機会を与えるべきであろう。教員はこのレコーディングが生徒のオーラルスキルを採点するものである事を正しく認識し、自身が話し過ぎる事がないように注意されたい。

WA に関する質問がされなかった学校が少数あった。また、パート 3 の最初ではなく、レコーディングの冒頭で教員が WA の質問をするケースもあった。ガイドに明記されているが、パート 3 では VS と WA とは別のトピックの内容について話さなければならない。これがなされていない学校がやや多い印象を受けたので、教員はこのパートで会話をリードする際にこの点に注意するようにしたい。

評価規準に基づく受験者の到達度

□ □ A

語彙や文法に注意を払い過ぎる生徒は発音とイントネーションが疎かになる傾向が見受けられた。教員の質問に対し、外来語を日本語ではなく母国語の発音を使い回答した生徒が多くいた。その結果、発声は十分であったが意味が不明な発言内容が思いの外多くあった。

文法に関しては、基本的な活用形と文型は殆どの生徒が正しく使っていた。

しかし、「です」「ます」等の表現を繰り返し使い、複雑な文法を使う事をしない生徒が多くいた印象を受けた。それらの表現を使う中で、過去形を用いずに現在形のみを使っている生徒もいた。発言内容は理解できるものの、正しい助詞の使い方がなされていなかったり助詞が使われなかったりする単語が羅列されたような発言もあった。たりたり形やて形や「なければなりません」等の表現を正しく使った生徒は比較的高く評価されていた。

高い成績を収めた生徒は、この規準で主要となる3つの要素のバランスが良く取れていた印象を受けた。特に、発音やイントネーションがほぼ正確であった事が共通項として挙げられよう。また、同じ語彙を繰り返し使う事を避け、言い換えをする際には努めて異なる表現方法を使っていた。そして、彼等は社会言語的能力に長け、総じてフォーマルな状況における教員に対する言葉使いや態度が適切であった。

□ □ B

殆どの生徒が簡単な質問には正しく答えられていた。しかし、文章で回答するのではなく語彙や表現のみを用いて返答するケースが多々あった。その為に、会話が継続できなくなったか発言の意図が不明になったりする場面があった。また、物事の詳細について述べたり自身の発言内容について一步踏み込んで叙述したりする事をしなかった生徒がやや多くいる印象を受けた。

生徒の言語レベルに合わせて質問がされていた学校のレコーディングでは、会話のキャッチボールが比較的良好にできていた。教員が質問の内容及びその聞き方に注意していた事と、質問を聞き直す際に同じ文を繰り返すのではなく、語彙や表現等を変えていた事が大きな理由として挙げられよう。質問をしてから間髪を入れずに回答の選択肢を生徒に与えたり、生徒が回答する前に「○○○ですか？」等と続けて話したりするのではなく、生徒に自身の言葉で回答させる事が望ましいであろう。

教員が質問した後生徒が黙ってしまう場面も比較的多くあった。質問の内容が理解できないのか、質問を理解していても回答できないのかが分からなければ、会話の流れが止まってしまう事がある。再度質問をするべきなのか、生徒が回答できない質問であるのかを適切に判断しているレコーディングは生徒の実力がよく引き出せていたと言えよう。

高い成績を収めた生徒は、教員がした質問に対して回答した後「なぜなら、」「つまり、」「また、」「たとえば、」等の語彙を使い自身の意見や考えを意識的に系統立てて話していた。その際に、それぞれの文章が長くも短くもなく、リズムよく話せていた。流暢に発言した生徒、そして考えながら落ち着いて話した生徒にそれらが共通していたのが興味深い。また、その結果として、レコーディング中に会話が滞る事なく進行していた。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

様々な理由により学校でのリソースが限られている事がある。そのような場合であっても、インターネットにあるアビニシオコースのトピックに関連した数多くの画像や映像を検索し閲覧する事は比較的容易にできる。教員はこのようなリソースを参考にして日本の文化や社会について授業の中でより効果的に教える事ができよう。

パート3での会話の中で、生徒のイントネーションと発音の間違が多い傾向がある。これは、生徒が会話をする過程で語彙や文法や話す内容等に注意が向き、パート1ほど自身の発音に注意が払われない為であるとも考えられる。教員はレコーディング中に生徒が正しいイントネーションや発音を継続してできるように、クラス内外のあらゆる機会を使いそれらのスキルの習得を助長する事が望まれる。

日本人生徒が同じ学校に在籍している場合は、双方にメリットのあるランゲージエクステンションのプログラムを組みアビニシオの生徒にイントネーションと発音のスキル向上の機会を

与える事ができよう。（日本人生徒はこのプログラムを通じてその学校の公式な言語を練習できるメリットがある）また、生徒が楽しんで視聴できる日本や日本語に関する映像を準備する事で、教員の解説や説明を通して生徒が自身のイントネーションと発音の短所を積極的に修正する事が期待できるであろう。

意思文の後に続く文の冒頭に「なぜなら、」「つまり、」「また、」「たとえば、」等の語彙を使う事で、生徒は発言をする際により幅が広く深い表現ができるようになるであろう。また、特にパート3での会話が一問一答形式のような質疑応答になる事を避ける為に、5W1H等の表現の効果的な使い方を教える事も有効であろう。

教員はレコーディングの前にその手順や評価規準について十分に理解しそれを生徒に説明する事が求められる。各パートにかける大凡の時間はアビニシオガイドの42ページに、それらのパートの注意事項は同ガイドの42～45ページに記載されている。教員はレコーディングの前にもその手順を再度確認するようにしたい。

Standard level written assignment

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 3	4 - 6	7 - 9	10 - 12	13 - 14	15 - 17	18 - 20

提出された成果物の特徴および適切さ

昨年同様、ab initio のレベル以上の漢字や語彙を使用する答案が多かった。

トピックの選び方がよりの確で、書きやすいトピックを選んでいる。例えば、「学校、料理、アニメ、年中行事、ファッション、スポーツ」などである。中には、「パスタ、化粧」などのように、内容がかなり限定され、ab initio レベルの力で書くことが難しいトピックもあった。

「翻訳機能」を使用したような不自然な表現があり、難しい語彙を使用しているわりには言いたいことがはっきりせず、点数を下げるケースが多かった。WA は基本的な語彙と文型を使っても、十分に可能な課題であることを再度認識しておきたい。

各パート (A: 説明 Description B: 比較 Comparison C: 意見 Reflection) に何を書くか、ほぼよく理解できている。しかし、A に、「トピックの提示」や「そのトピックを選んだ理由」について書く生徒が、まだいるのが残念である。何より、C の配点が 9 点あるため、ここに書くべき 3 つの質問について理解し、考えを深めて書いていないと、点数を大幅に失ってしまう。高得点の生徒は、C の部分が詳しく書けていた。

評価規準に基づく受験者の到達度

A. Description □ □

ほとんどの生徒は、日本の情報を 3 つ以上記述できていた。日本に関する情報ではなく、「トピックの提示」や「トピックを選んだ理由」について書いてしまうと A が 0 点になる。A が 0 点でも、次の B で日本と自国の比較をし、3 点とれている答案もあったが、A で 2 点を落とすのは、大きい。ここに何を書くべきか、求められていることをしっかりと理解しておくことが大切である。

見出しをつけずに、最初から日本と自国の内容を比較しながら書くと、すべて「B 比較」のパートとみなされ、「A 説明」の点数が 0 点になる可能性が高いので、注意が必要である。

A だけ、あるいは A と B が長すぎて、C が短い答案が目立った。

B. Comparison □ □

二つの文化の似ている点とちがう点について、よく比較できていた。A の説明で述べた日本についての情報に対し、自国ではどうかを対照的に述べている答案が多かった。

この部分が、A の内容に全く関係がなく、自国の単なる説明になっている答案もあった。A の内容に対応して書いていないと、比較したことにならない。

700 字という字数の制限があるので、ここまでをくわしく書きすぎないようにする必要がある。字数をオーバーしている部分は、採点対象にならない。その結果、C が 0 点になる答案もあった。

C ~ E: Reflection □ □

一段落でまとめて書かれている答案が、まだ目立つ。段落をつけ、小見出し(質問)をつけて書くとよい。区切れが分かりにくく、得点を落とす可能性もある。書くべきことを、はっきりと理解するためにも、3 つの質問をつけておくとよい。

Criteria C, D, E は、最も重視される部分である。簡単な説明や、一文しか書けていない答案では、得点につながらない。

C. Reflection, 質問 1 どんな点にびっくりしたか

A 説明と B 比較で述べていない「驚き」や「発見」について書く必要がある。A と B で既に書いた情報を言い換えたり繰り返したりしている答案は、得点に結びつかない。

「びっくりしました」「初めて知りました」の表現を上手に使っていた。

その情報を説明した後に、「おもしろいことを学びました。」「私はそれにびっくりしました」「このことをはじめて知りました」の文をつけるとよいが、単にこれらの文を書いただけでは、得点にならない。

D. Reflection, 質問 2 なぜ同じ点や違う点があるのか

単に「文化が違うから」「歴史が違うから」のような理由は、得点にならない。以前よりは減ったが、まだこうした理由の説明が見られた。また、B 比較で述べていた理由にあたる情報を繰り返しているだけの答案もあった。異文化を理解したことを、はっきりと示すためには、表面的な分析ではなく、その習慣がなぜ似ているのか、あるいは違うのか、深く考えることが必要である。

E. Reflection, 質問 3 日本人ならどう思うか

日本人がどう思うかを書く必要がある。既に述べた文章を繰り返したり、単に言い換えただけでは、得点にならない。内容を工夫して書くことが大切である。

「日本人はどう思いますか。A と B で述べていない点を書いてください」と、はっきりと指示することが大切である。

「日本人は、このことについておどろくと思います」「めずらしいと思うでしょう」のような表現を上手に使っている答案が増えた。

F. Language □ □

手書きでなくタイプするようになったため、使っている漢字のレベルが上がった。ほとんどが 3 点か 4 点とれていて、F が 1 点の答案は稀だった。4 点をとった答案の中には、ab initio レベルを超えているものも多く見られた。

漢字の誤変換や不自然な言い回し、タイプミスがあった。

G. Formal requirements □ □ □ □

敬体で書かれた答案が多かった。文体の統一はほぼできていた。

文献リストは、WA 答案の最後につけること。文献リストが、添付資料のファイルに混合されて作成されているケースがあった。

参考文献リストには、ウェブサイトのタイトルと URL、アクセスした日づけが必須。

日本語の参考文献の添付がない答案が多かった。文献リストのアクセス日が書かれていなくても、1 点を失うので、注意が必要である。

Ab initio レベルをはるかに超えた日本語資料もあった。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

□ □ の □ □ □ □

教師が、事前に必要事項や書き方についてしっかりと説明しておく。それぞれの項目で何を書くべきか、採点基準を見せて、どんな解答が期待されているのか、説明しておく。

教師が「自分で調べ、自分で書く」ことの大切さをしっかりと伝える必要がある。翻訳機能にたよらず、自分の力で書くことが、心構えとして大切。

比較しやすく、**C** の **3** つの質問に答えやすいトピックを選ぶことが重要である。どんなトピックが適切か、クラスで話し合うのも効果的である。明らかに **ab initio** レベルでは組みにくいトピックを選んでいる場合は、考え直すようにアドバイスするとよい。

□ き □ について

タイトルのない作品が目立った。全体を読めば分かることが多いが、タイトルがあるとどこに焦点を置いて書いているか、すぐに分かる。

見出し(**A** 説明 **B** 比較 **C** 意見)は、必ず書くように指導する。

A と **B** の部分を書きすぎない。**C** の配点が高いので、**C** をしっかり書くことが大切。

□ □ や □ □ つ □ □ の □ □

B 比較に必要な文型を指導する。例「日本は～だが、カナダは～」 「日本もタイも～」 「日本と違ってフランスは～」 「日本はドイツより～」

C に □ く こと

C は質問ごとに段落を分けて、できれば質問も書くとよい。見出しや質問文は、字数に入らない。これらの日本語訳は、教師が与えるとよい。**C-1** は驚きや発見を書くこと、例えば「私は～と知って、おどろきました」、**C-3** は日本人の視点であることをきちんと書く。例えば「日本人は、私の国で～と思うでしょう」

C が表面的な内容では、高得点はとれない。

□ □ □ の □ □

生徒の言語レベルに合う資料が、生徒自身で見つけられない場合は、教師がアドバイスする。**YouTube** のような動画を資料とした学生がいた。動画の場合は、日本語の字幕をつける必要があるため、動画の使用は避けた方がよい。

内容が確認できる添付資料の作成方法を事前に指導しておく。**PDF** の作成、統合や分割の方法など。

□ □ □ □ リストの □ き □

必要な情報は下記のとおり。

書籍 題名、筆者、出版社、出版年

Web タイトル、URL、アクセス日

□ □ のアドバイス

教師は第 1 稿に口頭でアドバイスしてよいので、添付資料や文献リストの不備はその際に指摘してあげれば、採点基準 G で点数を落とすことは少なくなるだろう。ただし、教師が添削したり、間違いを直したりしてはいけない。

その□

生徒名、受験番号を記載した答案が、いまだにある。無記名を徹底すること。

字数を記載すること。

行間をあけて書くこと。シングルスペースだと読みにくいし、採点マークがつけにくい。

漢字にルビをふる必要は無い。

Standard level paper one

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 5	6 - 10	11 - 17	18 - 23	24 - 29	30 - 35	36 - 40

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

Text B

Q15-19. 意味を理解して、その意味の語彙を見つける問題。特に Q18 は、よくできる学生でも「電気」と答える間違いがあった。

Text C

Q29-30. 答えを文章で書く問題。

Text D

Q35-37

その文章が正しいかどうかを見分けて、その理由を書く問題が苦手である。理由になる部分を正しく書けていても、正誤のチェックをつけるのが逆になっていることもあった。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

Text A

Q2 のように、数を表す基本の漢字は、よく練習できていた。

Q6 のように、ホールでできる楽しいことは、基本語彙としてよく理解できていた。

Text C

Q26 と Q28 は、質問の「どこ」「何キロ」に対応して、答えを見つけることができた。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

Text A

Q1-2 漢字を知っていれば簡単に解答できる問題だが、Q1 は「しまる」という語彙を知っている必要がある。

Q3 形容詞の漢字が読める必要がある。

Q4 「むりょう」「いりません」をペアで覚えておく必要がある。

Q5 「しぜんについての勉強」から「せいぶつ」という教科が答えになる。教科名は、基本の語彙としておさえておく必要がある。

Q6 ダンス、げき、音楽会、コンサートの 4 つの中から 2 つを書けばよいので、解答しやすい問題。

Q7-9 「ゆめはく」についての説明は 3 文だけであるが、できる生徒でも、間違いをしていることがあった。特に、Q8 と 9 は、まぎらわしい答えがあり、難しかったようだ。

Text B

Q10-11 テキストの「じぶんたちだけで」「うんどう場」が答えにつながる。学校用語として、うんどう場とスポーツグラウンドを覚えておきたい。

Q12 「むずかしかった」と「たいへんだった」は、ペアにしておさえておきたい。

Q13-14 「できました」「もらいました」の意味を理解している必要がある。

Q15-19 無回答か間違いが多い問題だった。この中では、Q15 17 19 ができていて、特に「リサイクル」という語彙は、思ったよりもよくできていた。「あんぜん」「とつきゅう電車」という語彙が、おさえられていなかった。Q18 はよくできる生徒が、間違って「電気」と答えていることが、多かった。基本語彙として、「きけん」と「あんぜん」をペアで覚えておくとよい。

Q20 記述式問題であるが、比較的よくできていた。質問文の「どうやって」から、「じゅぎょうでならう」「本でしらべる」の答えを見つけるのは、簡単だったようだ。

Text C

Q21-24 あいたところに、テキストの中のことばを入れる問題。中レベルの問題であるが、**Q23**は60分という間違いが多かった。「スポーツごみひろい」のルールについて説明しているので、「しあい(の時間)」または「時間」が答えになる。

Q25 「でもいい」「てはいけません」の文型を使った問題で、テキストを注意して読む必要がある。

Q26-28 「どこで」「いつ」「何キロ」とあり、問われていることが分かりやすい問題。**Q28**は、「ぜんぶ」という言葉を見落として、**23**キロと答える間違いがあった。

Q29 正答率が低かった。どんなチームがかつか、答えは、まみつかさんの言葉の中にある。「たくさんごみを見つける」という答えも正しい。質問の意味が分からなければ、正しく答えるのは難しいだろう。

Q30 「スポーツごみひろい」の良い点を見つける問題。できる生徒が間違っ「うれしくなる」と答えているのが目についた。「ごみを見つけてうれしくなる」は、正しい答えとは言えない。「ごみがへる」「リサイクルについて考える」「からだにいい」と、良い点が、はっきりと**3**つ書かれている。この中の**2**つを書けばよいので、読解力がある生徒にとっては、それほど難しい問題ではないはず。

Text D

Q31-33 質問文と答えを組み合わせる問題。「人が**68**万人せいかつしています」「インド人」「インドりょうり」がキーワードになる。

Q34 間違いが多かった。「ふえる」と「多くなる」をペアで覚えておくとよい。

Q35-37 正誤だけ選んで、理由を書いていない場合が目立った。また、理由は正しく書いていても、正誤が間違っている場合があった。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

□ □ □ □

問題の形式は、毎回同じなので、質問の答え方に慣れておくとよい。特に、要約文の穴あき問題、正誤と理由の説明、同じ意味の語彙さがし。過去の問題を使ったり、同じような問題を教師が作ったりして、練習するとよい。

テキストの中の単語を書く問題は、解答欄が長いので、文章を書くのかと考え違いする生徒がいるので、事前の指導が必要である。

写真やタイトルも、テキストの内容理解に役立つので、きちんと見るように指導しておきたい。分からない言葉は、写真、イラスト、タイトルから推量する練習も大切である。

「どんな、どうやって、どこ、いくつ、何」の疑問詞に注意して答える練習をする。

□ □ の □ き □

テキストの言葉を書き写す時は、写し間違いに注意すること。「二八〇」を「28」と書いた生徒がいた。また、助詞の書き間違いで、意味が変わることがあるので、注意が必要。

縦書きの文章に慣れていくことが大切。特に、縦書きで書かれた漢数字。

答えのアルファベットは、はっきり書くように指導しておく。解答欄の下枠に重なり、どちらか見分けにくい場合があった。はっきり判別できないと、得点につながらない。

最初に書いた答えを訂正する時は、はっきりと判別できるように、解答欄のすぐ横か別紙に書くように、指導しておくとうい。

□ に □ つ □ □

質問の中にテキストのどの部分を読んで答えるか指示しているので、質問をきちんと読み、重要な指示を読み落とさないようにすることが大切。

数字と形容詞に使われる漢字を練習しておく。

基本語彙は「やさしい、むずかしい」「安い、高い」「ふえる、へる」のように反対語をペアにして覚える。

基本文型を練習する。特に助詞と動詞をセットにして、基本文を覚える。どの助詞がどの語に結びつくか、助詞の徹底指導。

Standard level paper two

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 3	4 - 7	8 - 11	12 - 14	15 - 18	19 - 21	22 - 25

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

Q3 を選ぶ生徒は非常に少なかった。しぜんを大切にすることについて、自分の考えを書くのは、まだなじみがなく、難しいようだ。

Q4 を選んでも、質問の内容が理解できてない場合が目立った。「昼休み」の昼という漢字を見落として、日曜日や夏休みのことと理解して、旅行について説明した答案があった。

セクション B の中で、Q5 を選ぶ生徒が一番多かった。さよならパーティーについて日記を書くのは、書きやすいが、上下の得点差が大きかった。高得点の答えは、「寂しい」「悲しい」といった語彙を使って、気持ちを効果的に表現できていた。

スピーチと日記のフォーマットが、まだ完全に定着していないので、フォーマットに必要な事柄をおさえておくことが大切である。

多様な語彙と文型が使える生徒でも、つづりや助詞のミスがあった。動詞や形容詞の基本的な活用についてもミスしないように、おさえておく必要がある。

求められている情報を書くことはできても、始まりや終わりなどを工夫して書くのは、難しい。

段落の接続詞を使う練習もするとよい。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

メールやはがき、手紙のフォーマットをよく勉強していた。相手や自分の名前、あいさつの言葉を落とさずに書けていて、書き慣れているようだ。日記については、月日や天気、今日はどんな日だったか、きちんと書けている生徒が多かった。スピーチのフォーマットに慣れている生徒は、最初の自己紹介や話し始め、最後のあいさつが効果的に書けていた。

言語力については、つづりや助詞のミスがあるものの、いろいろな語彙や文型を使って、やや難しい文を書く努力が見られた。

基本的な語彙と文型が使えていた。できる生徒は、「と思います」「でしょう」「ので」「(理由の)から」「ながら」「～たいです」のように多様な文型が使えていた。形容詞のつなぎ形は、よく使えていた。

タスクで求められている情報の半分は、ほぼ答えられていた。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

セクション A

Q1 旅行先から友だちにはがきを書く問題。ほとんどの生徒はタスクを理解できていて、「いつ、どこ」については、よく答えられていた。しかし「どこにとまったか」について説明できていない生徒もいた。「とまる」という語彙を正しく理解できていなかったからかもしれない。できる生徒は、「ホテルにとまった」「しんせきの家にとまった」と、工夫して書いていた。旅行先からののはがきは、書き慣れているようで、全体的によく書けていた。形容詞の接続形を使っていた生徒も多かった。

Q2 気に入ったレストランに、友だちを誘うメールを書く問題。書き慣れているようだ。日本料理について書いている生徒が多く、すしやラーメン、カレーといったメニューをよく学習していた。食べ物のカタカナのつづりは、しっかり練習しておくといよい。レストランの良い点については、ほぼ説明できていたが、「おいしい」「いい」という簡単な説明だけの答えも多かった。できる生徒は、「店員がやさしい」「店が広くてきれいだ」と内容を広げ

て書けていて、よかった。二つの形容詞をつなぐ形や形容詞の過去形、否定形なども上手に使える生徒が多数いたが、つづりや助詞のミスが多く、情報を十分に伝えられない生徒もいた。課題文を正しく理解できず、友だちといっしょにレストランに行ったことを書いてしまった答案もあった。

セクション B

Q3 みどりが少なくなった町で、新聞社に手紙を書く問題。この問題を選択した生徒は非常に少なかったが、できる生徒は、問題点を説明して、自分たちができることをアイデア豊かに書くことができた。問われていることが理解できず、課題文をコピーしただけの答案もあった。

Q4 つまらない昼休みをおもしろくする提案についての話を書く問題。昼休みをおもしろくするために、クラブ活動を提案する答案の他に、日本の文化体験や校外に出かける提案をした答案もあった。ほとんどが、クラス全体へのスピーチ形式で書いていたが、中にクラスの友だち自分との会話形式で、スクリプトのように書いている答案もあった。会話形式で書いてもよい。

Q5 日本人の友だちが日本に帰るのでさよならパーティーに行った日の日記を書く問題。パーティーの様子やプレゼントについて、ほぼ説明できていた。気持ちについての説明は、できる生徒はアイデア豊かに、くわしく説明できていた。例えば、今までの楽しかった思い出を説明した後に、「寂しい」「悲しい」という気持ちを効果的に表現できていた。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

□ □ への □ □

課題文のコピーでは、点数がとれないことをはっきりと説明する。日々の努力や練習で点数がとりやすくなるということ、フォーマットの習得と文法事項のドリル研修が身を結ぶことを、常に生徒たちに伝えていくとよい。

フォ □ マットの □ □ □ □

手紙や新聞記事、メール、ブログ、スピーチ、日記など、いろいろなテキストタイプで、フォーマットとして必須項目が何かを理解して、作文を書く練習をする。ポスターを書く練習もするとよい。

□ □ の □ □

多様な文型が使えるように練習する。例えば、「・・・した後で、(理由の)から、ので」のような表現が使えると、言語面で得点が高くなる。複文をある程度、使えるようにしておくよい。

動詞、形容詞、助詞をきちんと正確に理解しておく。カタカナや漢字の練習や、言葉を覚える時間も、時には授業に入れるとよいだろう。正確さを高めるためには、毎日の練習が効果的だろう。

「そして、次に、それから」といった接続詞が使えるように練習をしておくといよい。

タスクの□ □

過去の課題文を理解する練習と、タスクにあった時制で書く練習をする。

□ □ の□ □

段落をとって構成を考えて書く練習をする。書き始めとしめくくりを工夫するとよい。

その□

発音練習や会話練習にも多く取り組むことが、効果をあげると思う。時間が許す限り、文化的な活動への参加をうながすとよいだろう。こうした活動に参加した後、作文をいくつか書くことができれば、生徒も作文に自信が持てるようになるだろう。

時間がない場合でも、話すだけの授業ではなく、読んで書くこと、多様なテキストタイプや多様なシチュエーションでの作文を書くことが必要だろう。

最近、自然環境について考える問題(みどりやゴミについて)も入ってきているので、自分の考えを表現する練習をするとよい。